



堂々たるスピーチだった

# 満足できる

## つかむべきチャンス

「どんな生き方をしている、人生には何度か大きなチャンスがあるの。そのチャンスをつかみ取れるよう、常にアンテナを張っていなさい」

私が上京前に、北海道の母からもらった言葉です。

入学式の祝辞を担当したきっかけは、ゼミの篠原教授からのお誘いでした。『入学式の祝辞に挑戦してみませんか?』

就職活動が本格化してきた時期、普段よりは余裕のない生活を送っていたので、このお誘いには、正直、少し戸惑いました。

けれど、5000人を超える人の前に立って話す経験は、人生でこれ以外、ないかもしれない。母の言葉を思い出し、大変でもきっと良い思い出になるだろうと、挑戦してみることにしました。

実は、中学時代に答辞を述べた経験から祝辞の内容は既に存在し、私は壇上で読むことだけを任されたのだと思っていました。

リハーサルと本番に会場へ赴き、読むだけならば、就活中でも可能だと高をくくっていました。しかし実際

## 学生記者 山下 蛍(経済学部4年)

中央大学の2017年度入学式(4月2日午前中部・多摩キャンパス)で経済学部4年の山下蛍さんが、新入生に向けて「歓迎の辞」を述べた。在学を代表する学生は、対象となる1000人超の4年生から選ばれた。登壇した経緯やスピーチ練習などの舞台裏を本誌学生記者でもある本人がつつった。

# 人生をつくれるように

## 入学式 在学生代表「歓迎の辞」

は、内容から言葉遣いまで全て自分で考える、というものでした。祝辞を担当した際に、一番緊張したのがこのときです。

詳細を聞かずに、自分の解釈で二つ返事をする、思ってもみなかったことになる、教訓を得ました。

内容も考えるのか。何を伝えよう。人生の経験値が新生とそう変わらない私に、話せることはあるのかと、就活以上に真剣に悩みました。

そこで3年前の入学式に出席したときの気持ち、会場である第一体育館の規模などを思い出し、ひとまず

内容は脇に置いて、シンプルに簡潔に理解されやすいような言葉を使った祝辞にすることにしました。

### まずは 聞いてもらうこと

新生だった私が聞いても、少しは耳を貸すような言葉遣いにしよう。相手に聞いてもらえなければ、壇上に立つ意味がない。そう考えました。

内容は、参加するご父母・ご家族に向けたものことにしました。個人的な見解ですが、ご父母・ご家族のほうが、学生の言葉に耳を傾け

てくれるイメージがあります。

在学生代表と紹介される私は「中央大学の学生」になります。「この大学に通ってれば、自分の子どももこんなふう成長するのかもしれない」

期待を抱いてもらうため、入学後3年間で身につけたことを話すことにしました。

それは、人との関わり方、そして距離感です。「人間関係は大切に」という言葉を耳にします。しかし、私にとって人を「大切にすること」は、非常に難しいことでした。



篠原正博  
経済学部長の話

### 礼儀正しく、英語も得意、将来の楽しみな学生

「スピーチをしっかり務めあげました、良かったと思います。一人では生きられない、周囲の人に感謝するといった内容は、彼女らしい。上級生の役割も立派に果たしました。

ご家庭の教育が良いのでしょう。実にしっかりしています。礼儀正しい。何事にも真面目に取り組む。スピーチの人選では、山下さんが最適である、と思いました。

英語が得意で発音はネイティブに近い。昨年のシンガポールの南洋理工大学とのワークショップや、ゼミ研修で訪問したニュージーランドのオークランド大学・マッセイ大学との交流でも、英語ができる彼女は水を得た魚のようでした。

問題意識を持ち、自分で自分の人生を切り開いていくタイプ。グローバル社会での活躍が期待できる将来の楽しみな学生です」

「辛くてもしんどくても、  
自分の道は自分でつくろう」

## 歓迎の辞より (抜粋)

「他者に対して礼儀を持って  
丁寧に接してください。  
一人ひとりの力は  
大きなものではありません」

### 人との距離感

どの程度で良いのかも分からず、言葉通り大切にせずして相手の依存を助長し、自分の身を滅ぼしかけるという経験もしました。

それ以来、人と接することに苦手意識を持ち、特定の人としか会話をしない日々を過ごしました。

狭いコミュニティの中での生活はとてもラクです。それでは世界が広がりがありません。日々少しの変化はあるものの、停滞が生まれてしまいます。

初めは見知った空間に安心してい

ました。しかし、徐々に自分の成長を感じられなくなってしまい、それから苦痛の日々でした。

私が出した結論は、人間関係は大切に接してつくるものではなく、丁寧に接してつくるものである、ということです。

それからは、礼儀と節度を持って丁寧に人脈を広げ、良い距離を保つことができています。

他人を大切にすることが苦痛に感じない人もいるでしょう。私はそうではありませんでした。もし、同じことで悩み、困っている人がいたら、私のよ

うな考え方や行動の仕方もあるのだと、伝えようと思いました。

### 感謝してゆっくりと

祝辞のなかに全てを詰め込むことはできませんでしたが、少しでも共感してくれる人がいてくれたら、うれしく思います。

私にとって今回の祝辞は、自然に行えるものでした。感想を聞かれても「いい体験ができた」という程度のものしか出てきません。

しかし、このような機会を与えてく

2017年度 4月2日  
中大入学式(午前の部)

- 対象 経済学部、商学部、総合政策学部、大学院
- 会場 多摩キャンパス第一体育館3階アリーナ
- 参列者 約5500人





## 文は人なり 関係者も落涙

山下さんのスピーチ草案を見た入学式関係者が落涙したという。相手の気持ちになって考える彼女の心情に胸がいっぱいになった…。別の関係者が言う。「草案からしっかりしていました。文は人なり、ですね」。舞台裏では準備段階から成功を信じていた。(編集室)

経済学部ガイドブック2018より

くださった篠原教授、祝辞の内容と一緒に考えてくださった職員さん、そして、感想をくださった皆さんには本当に感謝しています。

少しだけ人と異なる体験をすることは、大きな経験、思い出になります。今は実感がなくとも、今後、遠い大学時代を思い出し、誰かに話すこ

とがあるかもしれません。

これからも、降ってきたチャンスを見逃さず、ゆっくりと豊かな人生をつくり上げていこうと思います。